

# 第1章 高齢化の特徴と農業従事日数に占める割合

— 2000年農業センサスの分析 —

農林水産政策研究所 松久 勉

## 1 高齢化の特徴

### (1) 高齢化率の動向

第1表によれば、平均寿命の延伸、出生率の低下などにより日本の総人口の高齢化率（65歳以上比率）は、上昇傾向を示している。近年は平均寿命の延伸により75歳以上の割合の増加テンポが高まりつつある。農家では、18歳前後での進学、就職等により流出する人口が多いため、総人口と比べて高齢者の割合が高い。国勢調査の2000年の値は農業センサスの1985年の値と同程度で、農家の高齢化は我が国の平均よりも15年前後進んでいることがわかる。1990年以降、他の世代よりも人口の多い「昭和1ケタ世代」が65歳となったため、農家の高齢化は急速に進行し、10年間で8.6ポイントも上昇した。但し、1990～95年では65～74歳層での上昇が目立ったが、1995～2000年では65～74歳層の上昇幅が縮小し、75歳以上での伸びが高まっている。農家人口でも75歳以上の割合が上昇している。

第1表 高齢化率の動向

（単位：%）

年次	国勢調査			農業センサス		
	65歳以上	65～74	75歳以上	65歳以上	65～74	75歳以上
1980	9.1	6.0	3.1	15.6	-	-
1985	10.3	6.4	3.9	17.1	-	-
1990	12.1	7.3	4.9	20.0	11.5	8.4
1995	14.6	8.8	5.7	24.7	14.9	9.8
2000	17.4	10.3	7.1	28.6	16.6	12.0

資料：国勢調査、農業センサス

注：農業センサスの1980年、1985年の75歳以上のデータはない

### (2) 高齢者的存在形態

高齢化率が上昇するなかで、1戸当たりの高齢者数も増加している。第2表は、最近では1戸当たりの世帯員数が緩やかに減少する中で、高齢者数は増加を続け、2000年には全農家平均で1.23人存在していることを示している。地域別に見ると、1戸当たりの高齢者数には大きな差はみられないが、高齢者以外の世帯員数に大きなバラツキがあり、これが高齢者割合に大きく影響している。

また、高齢者のいる農家を推計すると、全農家の約7割が該当する結果が得られた。そのうち、ほぼ高齢者しかいないと思われる「世帯主が高齢者で子供のいない農家」が21%、「世帯主が高齢者で子供がいる農家」が45%、「高齢者はいるが世帯主でない農家」が35%と推計され、多様な存在形態で高齢者が存在していることがうかがわれる。なお、総農家の4割を占める「世帯主が男子高齢者である農家」の9割では配偶者がいることから、

高齢者の過半数では夫婦がともに存命の農家であることがうかがわれる。

第2表 1戸当たり世帯員数、高齢者数（総農家）  
全平均 (単位:人)

年次	1戸当たり世帯員数	1戸当たり高齢者数
1985	4.56	0.78
1990	4.51	0.90
1995	4.38	1.08
2000	4.31	1.23

資料:農業センサス

## 2 高齢者の農業就業

### (1) 農業従事者割合

農業生産には多様な作業があるから、体力・運動機能低下が生じている高齢者でも農業生産に参加できることが多い。また、高齢者は他産業での就業機会が少ないため、「働きの場」として農業に従事するものが多い。第3表により最近の農業従事者割合をみると、1990年時点で男子の78%，女子の56%の者が農業に従事しており、高齢者でも農業に従事する者が多かったことがわかる。2000年になると農業従事率はさらに上昇している。

第4表により年齢別農業従事者割合をみると、男子の65～74歳層と女子の65～69歳層では9割以上の値を示しており、ほぼ全員が農業に従事していることがわかる。また、男子で80～84歳層、女子で75～79歳層までは過半数が農業従事している。2000年の農業従事者割合が上昇していることを指摘したが、大幅に上昇しているのは75歳以上層であり、かなりの高齢になっても農業従事を継続している者が多いことがうかがわれる。

第3表 高齢者の農業従事率の推移(販売農家)

(単位:%)

年次	男	女
1990	77.8	55.8
1995	82.2	59.9
2000	87.4	69.8

資料:農業センサス

第4表 高齢者の年齢別農業従事者割合(2000年)

(単位:%)

	男	女
65歳-69	97.6	93.4
70-74	94.3	85.9
75-79	86.5	69.2
80-84	69.2	41.4
85-89	47.0	20.5
90-94	23.8	8.2
95歳以上	11.5	3.7

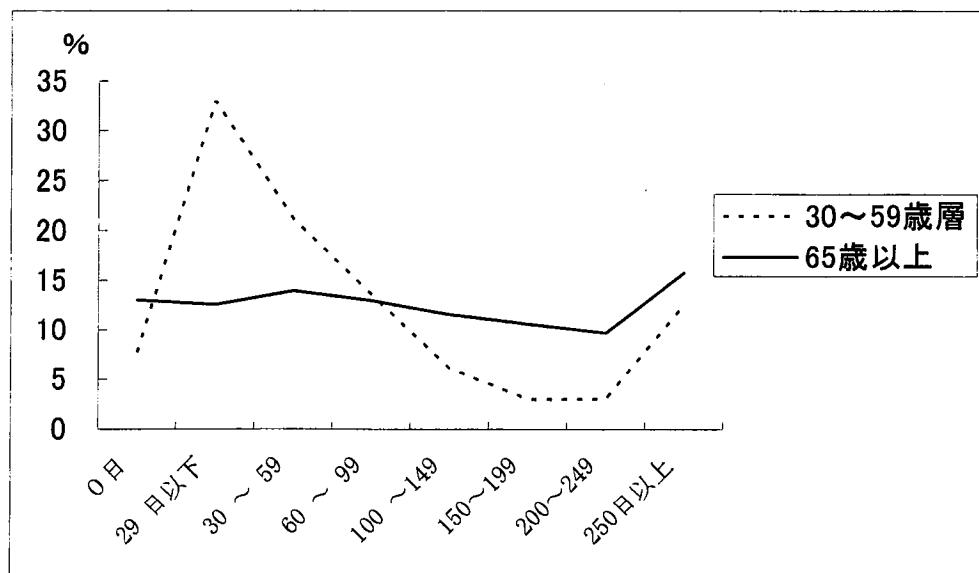
資料:農業センサス

## (2) 年齢別農業従事日数別割合

高齢者の農業従事者割合が上昇していることを指摘したが、農業従事者は少しでも農業従事した者であり、どの程度従事しているかはわからない。このため、農業従事日数別割合から、高齢者が何日農業従事しているかをみていきたい。

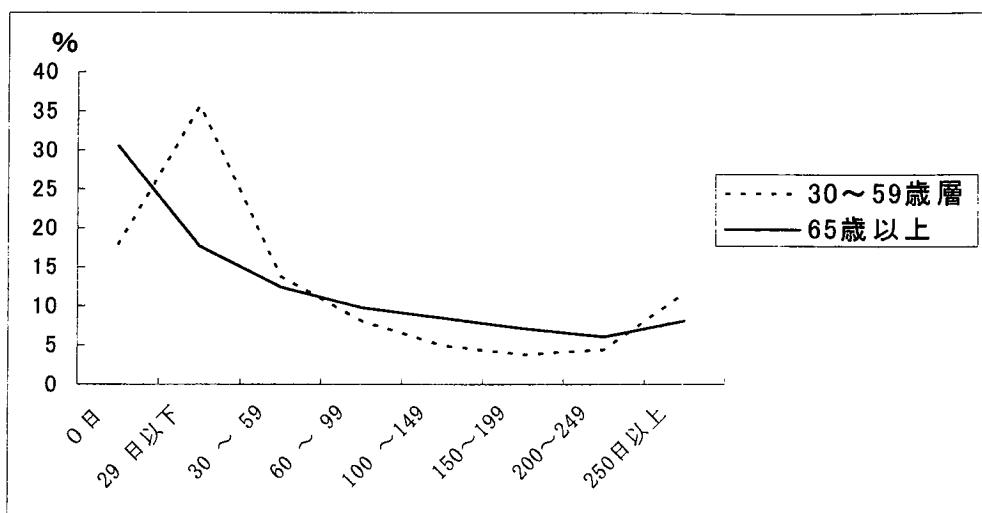
第1図に男子の農業従事者日数別割合を年齢別に示したが、30～59歳層と65歳以上層では分布に差があることがわかる。30～59歳層では、兼業の片手間に農業従事する者が多いため、「29日以下」、「30～59日」の割合が高い一方、「250日以上」というほぼ周年的に農業従事をしている者も1割程度おり、農業従事日数の少ないグループと多いグループの2つに分けられる。一方、65歳以上ではどの従事日数の階層でもほぼ同程度の割合を示しており、特定の階層での集中は見られない。これは、従事している作目や作業内容及び自分の体力に応じて農業従事日数が決定されたことによると思われる。ただし、65～74歳では、「250日以上」の割合が高く、75歳以上では「0日」と「29日以下」の割合が高く、加齢するにつれて農業従事日数は少なくなる傾向がある。第2図には女子の分布を示したが、30～59歳の分布は男子とあまり変わらないが、65歳以上では、「0日」、「29日以下」の割合が高くなっている。これは、65～74歳の分布は男子とほぼ同様だが、75歳以上で「0日」、「29日以下」の割合が高いためである。

以上、高齢者の農業従事は農業従事日数が特定日数に集中しておらず、多様な農業就業していることがうかがわれる。30～59歳層では、休日利用による農繁期の手伝いが中心的と思われる「29日以下」あるいは「30～59日」と周年的に農業従事している「250日以上」で多くの農業従事者が分けられるが、高齢者は農業従事日数から明確に分けることはできない。



第1図 年齢別農業従事日数別割合（2000年、男子）

資料：2000年農業センサス



第2図 年齢別農業従事日数別割合（2000年、女子）

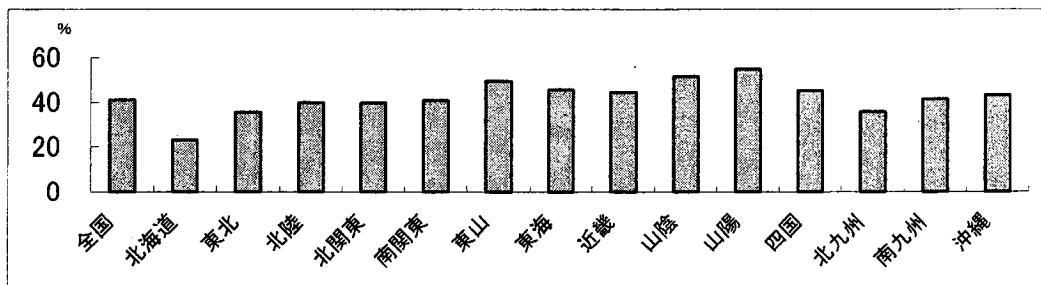
資料：2000年農業センサス

### 3 総農業従事日数からみた高齢者の割合

#### (1) 地域別

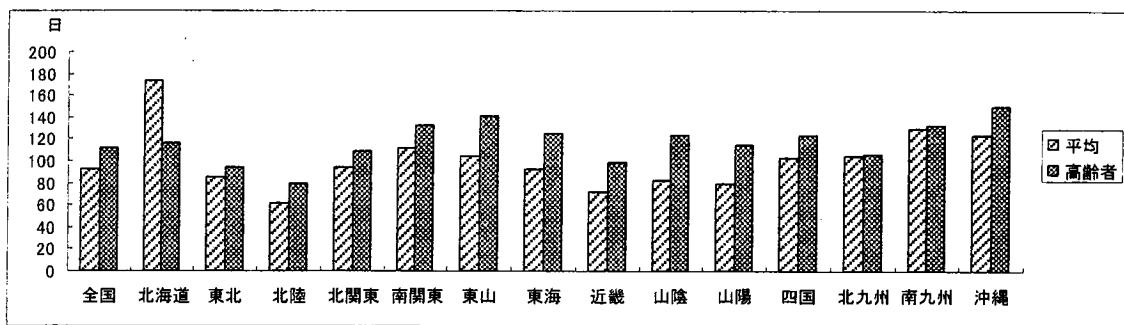
農業労働力の高齢化割合を考える場合には、各労働指標（農業従事者、農業就業人口、基幹的農業従事者、農業専従者など）に占める高齢者の割合を示すことが多い。しかし、前節で示したように、高齢者の農業就業は多様であり、単純な比較は難しい。そのため、より実態に近い割合として、総農業従事日数からみていきたい。なお、総農業従事日数とは、農業従事日数別農業従事者に各農業従事日数階層別の平均農業従事日数を乗じて求めたものである。

第3図によると、総農業従事日数に占める割合は2000年全国で41%であり、農業従事日数を考慮していない指標である農業従事者の割合33%，60歳以下で高い割合を示している「他の仕事が主の農業従事者」を含まない指標である農業就業人口の53%のほぼ中間の割合を示している。地域別には、北海道が低く、山陽、山陰では5割を超えている。



第3図 総農業従事日数からみた高齢者割合(2000年、男女計)

資料：2000年農業センサス



第4図 農業従事者の平均農業従事日数(2000年、男女計)

資料：2000年農業センサス

1995年と比較すると、全国では10ポイントの上昇を示しているが、北海道を除いてどの地域も全国平均程度の上昇をしており、どの地域でも高齢化が進行している。

なお、第4図により、年齢別の平均農業従事日数をみると、北海道を除いて、高齢者の平均農業従事日数は全年齢の平均日数よりも長く、高齢者が農業従事していることがうかがわれる。高齢者のシェアの高い山陰、山陽では全年齢の平均日数と高齢者のそれとの差がとくに大きい。

## (2) 作目別

第5表により作目別の高齢者割合をみると、稲作、果樹類で高齢者割合がやや高く、酪農、施設野菜などで低い。平均農業従事日数をみると、全体としては高齢者の平均農業従事日数は30～59歳の平均を上回っている。作目別では、高齢者割合と同様に、稲作、果樹類で高齢者の平均農業従事日数が長く、酪農、施設野菜などで短い。ただし、施設野菜、酪農などの高齢者の平均農業従事日数は他部門よりも長い。

第5表 作目別高齢者割合と平均農業従事日数  
(単位: %、日)

	65歳以上の割合	平均農業従事日数	
		30～64歳	65歳以上
合計	40.8	96	122
稲作	44.2	57	88
工芸農作物	41.5	136	156
露地野菜	42.1	156	178
施設野菜	30.5	218	201
果樹類	42.9	138	169
花き・花木	32.2	194	180
酪農	22.3	244	187
肉用牛	39.2	155	173

資料: 農業センサス

注: 作目別農家は、各作目の単一経営農家とした。

#### 4 むすび

以上のように、1節では農業センサスから分析できる高齢者の動向を示したが、まとめると以下の通りである。

- ① 高齢者割合は増加傾向にあり、特に75歳以上の割合が上昇してきている。
- ② 高齢者はほぼ7割の農家に存在しており、存在形態は多様である。
- ③ 高齢者のうち、65～74歳は9割以上が農業に従事しており、リタイアは少ない。75歳以上の農業従事者割合は上昇しており、かなりの年齢でも農業従事を継続している者が多い。
- ④ 高齢者の農業従事日数別割合は特定の階層に集中しておらず、個々の状況に応じて農業就業していることがうかがわれる。
- ⑤ 総農業従事日数での高齢者割合は41%であり、地域別には5割を超えている地域もある。作目別では、稲作、果樹類で高齢者割合がやや高く、酪農、施設野菜などで低い。

このように、農業センサスの特徴を示したが、高齢者は農家に広範に存在し、その存在形態は多様である。農業労働力の面でも、農業従事者割合が上昇する一方で、個々の状況に応じて様々な農業就業している結果が得られた。しかし、多様な農業就業が何によって規定されているかについては、農業センサスから分析することは難しい。例えば、農業センサスでは「家」としてどの作目を行っているかは調査しているが、世帯員がどの作目（作業）を行っているかはわからない。また、他の世帯員の就業状態との関係も明らかではなく、高齢者がその農家の担い手かどうかもわからない。つまり、農業センサスでは高齢者の量的把握についてはある程度できたとしても、質的な把握をすることはできない。